

さきほど読んでいただきました本日の旧約聖書は、「ぶどう畑の歌」と呼ばれているところです。『よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り、良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった』。豊かなおいしいぶどうを期待していたのに、食べられない収穫とは見做せないぶどうしか見当たらなかったというのです。このイザヤの預言は当時のイスラエルの人々に対する警告の言葉でありました。主なる神の言うことを聞かない、従おうとしないで悪の道に歩いていく人々を見て、イザヤは悔い改めを告げ知らせるために、このぶどう畑の歌を譬えとして用いたのです。

旧約時代の人々の中には悪がはびこっていたのがよくわかります。その悪は数えきれないほど、時代を超えてなされております。主なる神はそのような人々を見て非常に心をいためられ、ついにイスラエルを他国の手に渡し大きな屈辱を味わわせます。そしてようやく人々の心に悔い改めが生じたのです。イザヤを中心とした預言者達は主なる神から与えられた使命を果たすのに大変な苦勞をしておりました。そして多くは、多くの苦難を担い、人々は聞く耳を持たず、そして主なる神の怒りと人々の悪の間に立たされていたのです。

そして本日の福音書もまた、旧約聖書と同じぶどう畑の例え話でした。これはそういうことで選ばれているわけではありません。この二つの話は互いにつながっているのです。すなわちここに出てきました僕こそ、預言者達なのです。さきほど預言者達が多くの苦難を担っていたと申しましたが、それが具体的にここに書かれております。『だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた』。主なる神はご自分の医師にしたがって人々が生きることを望んでおられました。そして素晴らしい信仰の果実を期待しておられたのです。そして預言者達を通してその御心と事実を伝えさせたのですが、このような大変残酷なひどいことをしたのでした。人々が主なる神の前に悪を重ねるといのは、主なる神にとってはこういうことなのです。主なる神は遂に決断され、ご自分の子すなわち主イエスをこの世に遣わされ、人間の救いの業を全うなさいます。ところが人々はその主イエスを殺してしまったのです。『最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは

跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった』。主なる神にとって主イエスが十字架にかかわれたのは、このような人間の大きな深い罪の故であるのがここにはっきりと示されているのです。

この譬えが話された後、『祭司長たちやファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言っておられると気づき、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた』と書かれております。彼らは祖先達が主なる神の前にしたことをよく知っていました、何故祖先達が主なる神にひどい罰を下されねばならなかったのかもわかっていました。しかし今の自分達も主なる神の前ではちっともよくなっていない、罰を受けた人達を全く同じ状態であることに気づいていませんでした。それが主イエスによって示されたのでした。彼らは早速悔い改めるべきだったのです。しかしそれどころが捉えようとした、殺そうとした、というのです。旧約時代の人々と全く同じであることが明らかです。そしてついに彼らは主イエスを十字架につけて殺してしまうことになるのです。この場面は主イエスが十字架にかかられた三日前にあった出来事とされております。

本日の福音書が教えていることは、「主イエスを十字架につけた人は誰か」ということです。それは正しいものを疎ましく思う、曲がった人間が正しくされることよりも、間違っただまま生き続けるほうがよい、それを認めてくれるほうがよい。警告の声は邪魔である。そういう者が十字架につけたということです。私たちも罪のうちにあり、正しくは生きることが出来ない存在です。主イエスはそういう私たちに対して「誰が私を十字架につけたのか」と問うておられるのです。誰が自身をもって「私ではありません」と言えるのでしょうか？ 私たちは、そんなひどいことはしはしないと思っておりますが、主なる神の前ではどうなのか、自分は主なる神の前に堂々と立てるのか？それが問われているのです。私たちそれぞれの中でこの答えを見つけだしたいものです。それは何よりも、主イエスを通して示された、主なる神の深い愛を私たちのうちに見出すことなのです。